せて居る如き、更に各地間の里數を記することの細密に及んで居る如きはその主要なる點である。今一々これらについて論證することを避け、敢て同學の士にこの資料を提供することに止めたいと思ふ。

思ふに古來この種の地志は各地方に於て編纂せられ、通志府縣志などの源流を爲したものであらうが、名山もこれを藏するに由無く、空しく湮滅に歸せしめたのは殘念である。

註① Journal of the Royal Asiatic Society. 1914 and 1915.

② BEFEO. VIII. (1908), 519–520.

③ 敦煌石室遺書第一册

④ J. A. 1916. p. 113.

⑤ 余は一九二〇年滯英の當時この全文を寫眞した。今東洋文庫に藏せられる原板はそれである。

⑥ Le "Cha tcheou tou tou fou t'ou king," J. A. 1916.

⑦ 藤田博士「西域研究」（第一回）。（史學雜誌第三十五編第十一號）。神田學士「祆教雜考」。（史學雜誌第三十九編第四號）。石田學士、『神田學士の「祆教雜考」を讀みて』。（同上第六號）。

⑧ 國學叢刊第六卷所載、羅振玉氏張義潮傳。

⑨ 敦煌遺書活字本第一集所載張懷慶邈眞讚。

⑩ 前出「西域研究」（第一回）。

⑪ この誤については既に神田・石田兩氏も前記の論文中に指摘せられた。

⑫ 余が藏する天寶十載七月十七日文書。

⑬ 新唐書卷二百十一上、西域傳于闐の條。册府元龜九百六十四外臣部封册篇。

⑭ 前出藤田博士「西域研究」（第一回）扜泥城と伊循城の項參照。